

「富士箱根見学と採集の会」報告

浅井恵子
当津 隆

と き 昭和57年8月7日～9日
講 師 農学博士 室井 綽先生
理学博士 笠原基知治先生

第1日

恩師当津先生のお誘いをうけて室井博士と植物採集ということで参加させていただき、三鳥駅ではお顔も存じあげない先生方の仲間に入れていただき室井先生をお待ちしていた。

20～30分の後、室井先生のお迎えでマイクローバスに乗り込む。荷物を足もとに置くと同時にもう室井先生のマイクの声、「右を見なさいケヤキだ。左を見なさい何の木だ。木偏に南と書いて何と読む？。「クスノキやねえ」といっても通じない。そう、ノタブノキだなあ」だって。私はクスノキと読んでいたのに。樟がクスノキだそうだ。そして又右の方を……。「ソテツの雄と雌があるなあ、見ればわかるなあ。あぁアメリカフヨウがきれいな花を咲かせているなあ」。少したつとまた「ここに富士川が流れているが、川の底を見なさい。熔岩が流れ込んでかたまっている」。本当に川の底には黒い熔岩がかたまっている、その熔岩の間を水が流れていた。

そうした説明を聞いているうちに富士竹類植物園に到着した。植物園に着くと早速、すいか、とうもろこし、麦茶をごちそうになった。何ともいえない自然の甘味を感じた。

植物園に栽培されている420種余りのうちから100種はおぼえて帰ってほしいといわれた。説明された主なものを略記すると、

竹…筍が成長して竹になる時に皮が落ちるものをいう。笹…成長してもたけの皮が腐るまで、くっついている。バンブー…地下茎が短かく、株立ちになっている。

マダケ 割りやすく、弾力性に富んでいるので竹細工に利用されている。節からは2本ずつ枝が出ている。葉のつけ根の所に毛がある。

モウソウチク 中国大陸から鹿児島へ伝わる。筍が他の竹より大きく、早く出るので食用として栽培される。

キッコウチク 節間が亀甲状にふくれている。

ブツメンチク 節間の亀甲型がよくあらわれたもの

ハチク 茶筌などの細かい細工物や装飾用に利用される。

シカクダケ 稈が四角形で稈にとげがある。

ラセツチク 節がねじれている。

ナリヒラダケ 全体が赤紫色をおび、枝が短かく、葉先

が下垂して優雅さにあふれている。

ホウライチク 地下茎が短かく株立ちになる。筍が8月頃から出る。

ホウオウチク 葉が小さく密生し鳳凰の羽を思わせる。

スホウチク 秋になると稈が赤くなる。

コマチダケ 葉が細長くて稈に孔がない。

ラッキョウヤダケ 節間がラッキョウのように膨れ、また地下茎もじゅず玉を連ねたようになる。

キンメイチク、ギンメイチク、オウゴンチク、シボチク、メグロチク、ゴマダケ、ヒメハチク、リュウキュウチク、キッコウカンザン、ムツオレダケ、タンバハンチク、ウサンチク、タイワンマダケ、ハガワリメダケ、フィリシヤなど、

いろいろと説明を聞いている時、ゴロゴロと雷が鳴っていたが、突然大雨が降ってきたので急いでテントの中へ待避する。

次は天然記念物の駒門の風穴の見学だ。風穴へ着くまでの間ずっと室井先生の説明が続く。「ヒノキの林が見える。こちらはサワラだなあ、よく見ておきなさい」といわれても……。ヒノキは行儀よく三角形にのびあがっているが、サワラは行儀悪く枝を張っているの、すぐにわかるとのこと。近くで葉裏を見ると、ヒノキはY字になっているのに対して、サワラは先がとがっている。

風穴は富士山の大火発と共にできたもので、本穴（入口より291m）および枝穴（岐点より110m）に分れている。凸凹の変化が多く、天井からは無数の熔岩が垂れ下がっている。熔岩はとともかたく、天井も低いので、ずっと腰をかがめて歩くのに苦労した。

横穴も立入禁止区域なのに「どんどん行きなさい」といわれ、歩いても歩いても細長い黒い熔岩ばかりでまいてしまった。洞内の気温は夏冬を通じて13℃で、夏涼しく、冬暖かい風穴だそうだ。

風穴を出たあたりもいろいろと野草があり説明を聞く。アカネ、ツルボ、シンミズヒキ、ヒメドコロなど。

自然真道の宿舎に帰り、笠原博士の「植物の形態」についての講義をきいた。（内容省略）

第2日

山の冷気に包まれた自然真道の宿の朝は今日も快よく明けた。昨夜おそくまで続いた室井博士の植物談義が朝のあいさつのなかに交わされる。いかにも研修会ムードいっぱいである。専用バスに乗る。今日のコースは富士山麓青木ヶ原から五合目あたりまでの調査である。早速、室井博士の解説がはじまる。富士竹類植物園長も兼ねておられることもあって、ここ一帯はとくに念入りの調査済み。一木一草すべて胸のうち、次の四つ辻を曲がるころあらわれる植物の解説があるかと思うと、また何れ窓

外に見えてくるであろう花の咲き具合までお見透しである。この一日、書き記した植物名を順を追ってならべてみる。

ノリウツギ、障子紙に使う和紙の糊の原料となる。沙羅双樹の話も面白い。いつ誰が言いはじめたのか、仏教の聖樹に擬せられたナツツバキのことである。次はスギの樹形の説明だ。六甲あたりのスギとの違いに納得する。これから旅をするときの参考にしようと思う。ヒトツバカエデ、シナノグルミ、栽植されるオニグルミ、ゴボウに似た葉のヤマボクチ、ユリ科の多年草ユウスゲ、大形のオオバギボウシ、セリ科のシシウド、そしてハチクが現われるや、さすが竹博士の面目躍如。蘊蓄ある口調に耳を傾ける。茶筌についての知識を得たのしみを味う。ヤマアワの群落を過ぎるとフジアカショウマ、キンケイギク、カモガヤ。海拔1200~1300mにさしかかる。カモガヤはオーチャードグラスのこと。ヨーロッパ、西アジアからアメリカを経て日本に移入された牧草である。コンニャクが見え、ブナがあらわれるころになるとバスの中まで涼気が伝わってくる。フジマツ、シラカバ、モミの林が続く。ツルアジサイ、ホタルブクロに雲が降りてきて山の雰囲気しきり。ブナの実を見つけた。豊年のしるしという。

モミがだんだん大形にかわっていく。ウラジロモミの樹形が美しい。イタドリの仲間で花被の赤いメイゲツソウ、オミナエシの仲間のキンレイカ、そして旅情をさそうカラマツ林にミヤママタタビ、ミヤマハンノキ、ミヤマアキノキリンソウと深山の趣が加わる。ナナカマド、ヨツバヒヨドリ、ロマンチックなシラカバ林、ウラジロモミの林をぬけるとヒロハノヤマハハコ、ヒメノガリヤスの穂がゆらいでいる。アメリカからやってきたチモンーはキヌイトソウと呼びたい。

海拔2000m、富士山三合目にかかる。三合目というのは35歳の男性が歩いて、たね油を三合燃やしつくしたところだそうである。このあたりまでヨーロッパ産のクローバが侵入している。自動車が運んできたのであろう。高くなるほどに風が強くなる。季節風の吹く方向に枝がはっている。ツガやカラマツの樹形を見ていると富士の風の強さを思う。道端には安山岩のこわれたかけらが転がっている。自動車の往来のはげしさはどこまでも続いている。路傍の植生が荒れるのも当たり前だ。しばし自然保護か観光かと考えさせられているうちに人ごみの五合目に着いた。

五合目からはほとんど植物がなく、フジマツとイタドリだけが印象に残っている。遠雷を聞きながら下山した。

第3日

朝食後、皆さんと記念撮影の後バスに乗る。3日目の今日は箱根の大湧谷・小湧谷をめざして、いいお天気に恵まれ出発した。箱根ではノリウツギ、リョウブの花がたくさん見かけられた。

箱根の山をあとにして二岡神社に詣でる。ここには珍しい野草がたくさんあった。カナムグラ、ダツタンソバ、オオハンゴンソウ、ノブキ、ツルニガクサ、モミジガサ、トチバニンジン、ハエドクソウ、カキノハグサ、ダイコンソウ、オオシラガゴケ等々。

再びバスに乗り三島駅へ、だんだんお別れの時間がせまってくる。室井先生の冗談まじりのご説明に何とも言えない親しみを感じ、本当に楽しい3日間でした。さいわいにも神戸にご在住とお聞きし、今後のご指導をお願いして感謝してお別れしました。本当にいろいろとありがとうございました。



参加者の記念写真（自然真道前庭）